

ギターの小路(Ⅲ)

《加藤 繁雄ギターリサイタル》



プログラム

4つのブラジル民謡組曲(田. ヴィラ=ロボス)

過ぎ去りしトレモロ(A. バリオス)

“ファンション”の主題による大変奏曲(M. ジュリアーニ)

牧歌6重奏の主題と変奏曲(ブラームス)

フーガBWV1000(J.S. バッハ)

さくら変奏曲(横尾~加藤編)

※賛助出演/原 静雄

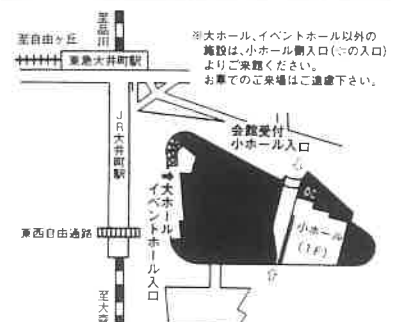
'92 3月22日(日) 開演 P.M2:00
まゆりあし・小ホール (P.M1:30開場)

入場料 ¥2,800(当日¥3,000) 全席自由

チケットお問合せ TEL(03)3761-6719 TEL(03)3399-3161

シグマ・ギタースクール

ジーエム・アーティスト



ギターリの小路Ⅲ

《加藤 繁雄ギターリサイタル》

'92 3月22日(日) 開演 P.M2:00
まゆりあし・小ホール (P.M1:30開場)

ごあいさつ

本日は御多忙の折り、《ギターの小路（Ⅲ）加藤繁雄ギターリサイタル》に御来場下さいましてありがとうございます。月日の経つのは早いもので、ギターの小路（Ⅰ）を行ったのはもう4年も前のことです。以来多くの人に支えられてなんとかここまで辿り着くことができたことは感慨深いものがあります。取り分け今年はこちら「きゅりあん」でリサイタルできることを私自身楽しみにしていました。どんな響きになるか期待と心配が交錯しています。

さて、今年のプログラムはいつもと違って、今回初めてお届けする曲が多いことと思います。私がこのシリーズを始めたときに思ったことは「ギターの美しい作品をできるだけいっぱい聞いてもらいたい」と言う事と、自分自身がどこまでできるか常にチャレンジしたいと言う事でした。かといって、まったく知らない曲を延々と続けられるのは聞く人にとってはそんなに楽しいことではありません。今回のプログラムでは第1部には割と耳にすることは少ない作品（しかしギター曲としては有名な美しい曲）を、第2部では皆さんがよく知っている作品を多く集めたつもりです。また、今回も私の相棒に原 静雄さんを迎えてギター2重奏も用意しています。今日一日が皆さんの心に残る様な演奏を目指して頑張りますので、どうぞごゆっくりと楽しんでいって下さい。

最後になりましたが私のリサイタルのみならず、常日頃多大なお世話をいただいています「GMアーティスト」の皆様にも厚く御礼申し上げます。

平成4年3月22日

加藤 繁雄

〔加藤繁雄プロフィール〕

北海道苫小牧出身、12才よりギターを病室にて独学、昭和56年東北ギターコンクール入賞、昭和57年全日本ギターコンクール首席入賞、昭和61年西日本縦断コンサート、昭和63年～平成2年「ギター名曲170選」（ドレミ楽譜）のレコーディングを行う、平成3年、音楽監督として率いているギターアンサンブル「ザ・ステア」がJGA賞受賞、シグマギタースクール（大森）主催。

〔原 静雄プロフィール〕

北海道歌志内出身、8才よりギターを独学、室蘭工業大学時代に「大聖堂（A. バリオス）を弾く、昭和60年、シグマギタースクールに入学し、ギターアンサンブル「ザ・ステア」のコンサートマスターに就任、《ギターの小路》ではずっとDUOを組んでいる。

♪ プログラム

第 1 部

1. ソナタ ホ長調K380 (D. スカルラッティ〜加藤繁雄編曲)
2. フーガ BWV1000 (J. S. バッハ〜加藤繁雄編曲)
3. 4つのブラジル民謡組曲 (H. ビラ=ロボス)
 1. マズルカ・ショーロ (イ短調)
 2. ショティッシュ・ショーロ (ホ長調)
 3. ワルツ・ショーロ (ホ短調)
 4. ガヴォット・ショーロ (ニ長調)

===== 休

憩 =====

第 2 部

4. F. ターレガ小品集
 1. ワルツ・二人の幼い姉妹
 2. ポルカ・ペピータ
 3. ゆりかご
 4. ワルツ・ニ長調
5. 過ぎ去りしトレモロ (A. バリオス)
6. 歌劇《ファンシオン》の主題による大変奏曲 (M. ジュリアーニ)
7. スペインセレナータ (J. マラッツ〜F. ターレガ〜加藤編)
8. 弦楽6重奏のための主題と変奏曲OP. 18 (J. プラームス〜J. ウイリアムス編)
1st ; 加藤繁雄 2nd ; 原 静雄 (賛助出演)
9. さくら変奏曲 (日本古謡〜加藤編)



作曲家 & 作品解説

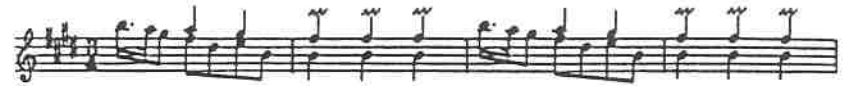
(解説；加藤 繁雄)

●ドメニコ・スカルラッティ (Domenico Scarlatti 1685~1757)

バッハやヘンデルと同じ年に生まれたイタリア(ナポリ)の作曲家で、大チェンバロ奏者です。スカルラッティのほとんどの作品はチェンバロ(ハープシコード、ピアノの前身の楽器)の為に書かれた曲で、今世紀に入ってからその作品が多く発掘され、評価を得ています。当初はロンゴ氏が出版した作品集から「Lナンバー」が付されていましたが、オリジナルからかけ離れた改訂や変更があったためラルフ・カークパトリック氏が訂正し、スカルラッティの本来の姿を発表しました。以後「Kナンバー」が多く使われています。

[ソナタ ホ長調/K380]

(Sonata E Major)



スカルラッティのソナタは100曲以上にも成りますが、どれもがバロックの気品に満ちた作品です。チェンバロという楽器は鍵盤楽器ですが、弦を針で引っ掛けるといった構造をしていたために「音量のコントロールができない」欠点がありました。(因みに「ピアノ」という楽器は「ピアノ(小さく)、フォルテ(大きく)」ができることから当初は「ピアノフォルテ」という名前だった訳です)スカルラッティはこの欠点を音の数でもって音量コントロールした一人です。K380番はバロック音楽らしい、きびきびとした愛らしい作品といえます。できるだけ原曲に忠実にアレンジしました。

●ヨハン・セバスチャン・バッハ (Johann Sebastian Bach 1685~1750)

音楽史に於いて最も偉大な作曲家の一人といわれる「大バッハ」は、音楽的な家系の中から1685年3月21日、アイゼナハ(ドイツ)に誕生しました。10才のときに父を亡くし、バッハは歌手として働いています。オールドルフ、リューネブルグ、ワイマール時代の10代に幾つかの作曲を行い、20代にはアルンシュタット、ミュールハウゼン(22才でマリーア・バルバラと結婚)、ワイマールに住み、オルガン曲やカンタータ(歌)を残しています。そして生涯で最も充実していたといわれるケーテンに住み、多くの器楽曲を残しました。35才のとき妻を病気で失い、翌年アンナ・マクダレーナ・ヴィルケと再婚します。38才でケーテンからライプツィヒに移り、膨大なカンタータやオラトリオを書き、1750年、65才で世を去りました。眼科医ジョン・テーラーの目の手術が2回失敗し、バッハの命を縮めたとされています。(何とこの眼科医はヘンデルの目の手術も失敗しています! 音楽家殺しのテーラー……くわばらくわばら)

[フーガBWV1000]

(Fuga BWV1000)



ギターの前身とされる「リュート」という楽器が当時よく使われていました。バッハ自身が間違いなく自筆で書いたリュートの作品の1つがこの1000番です。バイオリンのソナタ集の第1番(BWV1001)が原形で、バイオリンの譜面より2小節長くなっています。かつてはF. ターレガがバイオリン譜からギター用に編曲した物が多く演奏されていましたが、今日ではリュート譜から編曲するほうが一般的です。「フーガ」とは音楽形式の1つで簡単にいえば「輪唱」ですが、提示部、嬉遊部が次々に表れ、最後は結尾部で締め括られます。

●エイトル・ビラ＝ロボス (Heitor Villa-Lobos 1887~1959)

ブラジルの大作曲家、ビラ＝ロボスはリオデジャネイロに生まれ、6才のときに父親よりチェロやピアノを教わりました。父親はアマチュアの音楽家でしたが大変熱心に教育し、ついにはオーケストラのすべての楽器をマスターしたといわれています。一方で彼はブラジルの民謡にも興味を示し、最初に作曲したのはギター曲でした。11才で父親が死に、以後は独学で音楽や楽器の勉強をしました。17才のときに「ショーロ」という小さなグループでギターを担当し、以後の演奏活動はいろいろな楽器をこなせるために各方面で活躍していました。31才のときにルーピンシュタイン(ピアニスト)、タルエルミオ(作曲家)と出会い、創作活動に大きな影響を与えました。ギターの神様といわれるセゴビアとも親交を持ち、「前奏曲集」や「練習曲集」、「ギター協奏曲」等を発表しました。「ブラジルのバッハ」ともいわれ、1000曲以上の作品を残し、生まれ故郷のリオで1959年他界しました。

[4つのブラジル民謡組曲]

敢えて「4つの」としたのは、実は5曲あるためですが、残りの一曲は4曲が発表されてから10年以上経っているものであることと、全体を通して見た場合に最後の作品だけ「違和感」があるためです。1908年に「マズルカ・ショーロ」「ショティッシュ・ショーロ」、1912年に「ワルツ・ショーロ」「ガヴォット・ショーロ」を発表しました。メドレーでお聞き下さい。

1. マズルカ・ショーロ (Mazurka Choro)

イ短調、3/4拍子、作曲者の異国への憧れを感じさせる1曲です。ショパンを意識して作られているようです。



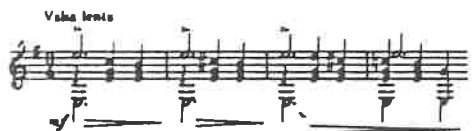
2. ショティッシュ・ショーロ (Schottish Choro)

ホ長調、2/4拍子、アレグレット、スコットランド風のショーロです。ポルカにも似たリズムを持っています。



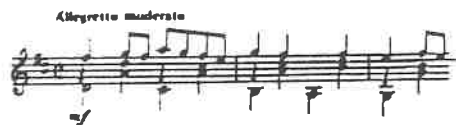
3. ワルツ・ショーロ (valsa Choro)

ホ短調、3/4拍子、レント
深い、暗い悲しみに満ちたワルツです。



4. ガヴォット・ショーロ (Gavota Choro)

ニ長調、3/4拍子、アレグレット・モデラート
バッハのチェロ組曲第6番ニ長調のガボットを題材にしています。他にもバッハを使った作品が多数あります。



==== 休憩 (INTERVAL) =====



● フランシスコ・ターレガ (Francisco Tárrega 1852~1909)

ターレガはスペインのカスティリオン、ヴィリャリアルに生まれたギタリスト、作曲家で「近代ギター之父」と呼ばれています。幼い頃に事故で目を悪くし、それを案じて父親がピアノを習わせますが、ギターの名手アルカスの演奏を聞いてギターを弾くことを決意します。マドリード音楽院で和声、ピアノ、作曲等を学び、それらのすべての技法をギターに応用し、マドリードでギタリストとしてデビューしました。その後スペインはもちろん、遠くロンドン、パリまで演奏旅行して「ギターのサラサーテ」と言われるほどの名声を博しました。しかしながら当時のギターに対する偏見と低い認識のために経済的には恵まれず、貧困の中に多くの名作を残して1909年、57才でバルセロナに没しました。

[小品集]

ターレガは小品の中に尤もターレガらしいスタイルを見出すことができます。多作家とは言えませんが小品は数多く、しかも一曲一曲が宝石のように光り輝いてとてもデリケートでロマンチストであることが分かります。これらの作品が演奏されることは少ないのですが、私のシリーズでは是非色々とお紹介していきたいと思っています。4曲メドレーでお聞き下さい。

1. ワルツ・二人の幼い姉妹 (Las dos Hermanitas)

イ長調、3/4拍子 短い前奏の後、愛らしい、踊りたくなるようなワルツが始まります。



2. ポルカ・ペピータ (Polka Pepita)

ニ長調、2/4拍子 ポルカはチェコの舞曲で、早い2拍子です。ペピータは少女の名前。ちょっとおどけた感じです。



3. ゆりかご (El Columpio)

ニ長調、2/4拍子、レント
ゆりかごにゆったり揺られている気分のある
とてもリラックスした作品です。



4. ワルツ・ニ長調 (Vals en Re)

ニ長調、3/4拍子
再び快活なワルツをお楽しみ下さい。
鳥の鳴き声を思わせる部分が印象的な作品です。

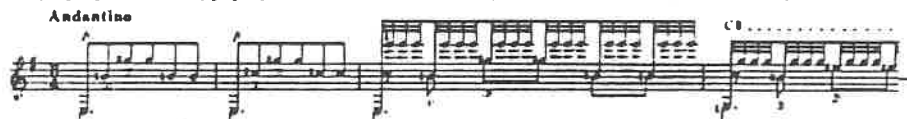


●アウグスチン・バリオス・マンゴレ (Agustin Barrios Mangore 1885~1944)

1885年5月5日、パラグアイに生まれ1944年にエルサルバドルで心臓病で世を去った偉大なギタリスト、作曲家です。15才のとき国立専門学校に入学し、25才から南米、中南米を演奏旅行しています。37才で初めてセゴビアに会った時にはセゴビアにギター奏法の助言をしています。ギター製作家として有名なサントス・エルナンデスが書いた「想い出集」で「セゴビアは、初めて南米に行ったときは左手の技術が甘かったが、バリオスに逢って助言を受けてスペインに戻ってからは、その技術は完全なものになった」と言っています。「マンゴレ」と言う名前はパラグアイの大森林に住んでいた大酋長の名前に因んで付けられたと言われている。バリオスはギターのみならず哲学者、神学者、詩人でもありました。語学も数か国語を話し、アメリカ大陸には音楽学校を創設しました。ギター弦も、今日使用しているナイロン弦の響きに最も近い音を出していました。(当時はナイロンが無かった。)前述のH. ビラ＝ロボスにも多大な影響を与え、バリオスの「告白」を聞いて「前奏曲第1番」を書き、「悲しみのショーロ」を聞いて「特徴的ショーロ」を作曲した、と言われています。今日では自演のレコードが僅かにあり、その驚異的なテクニックを楽しむことができます。

[過ぎ去りしトレモロ]

(El Ultimo Tremolo)



バリオスは晩年、エルサルバドルでひっそりとギター教授の生活を続けていた。そんな或る日、彼の住まいの戸口をみすばらしい老婆がノックし、お恵みをねだった。バリオスはそのノック音(前奏の2小節にそれが暗示される)と哀れっぽい声に靈感を得て、ほとんど即興的にこのトレモロの名作を書き上げたと言われています。彼の最後の作品となったこの作品が、モーツァルトの「レクイエム」のように運命付けられていたとは、人生の不思議を感じざるを得ません。

●マウロ・ジュリアーニ (Mauro Giuliani 1781~1829)

1781年、7月27日イタリアのピスツェリエと言う小さな町に3人兄弟の次男として生まれ、楽器は最初バイオリン、次にフルートを学び、その後ギターを手にしてこの楽器が彼の一生のものになりました。20才のときそれまで住んでいたポーニアを去り、ヨーロッパ各国に演奏旅行に出ています。27才のときにウィーンに定住し、イタリア人の持つ美しいメロディーとウィーン派のもつ音楽形式により素晴らしいギター曲を書いています。ベートーベンやシューベルト達とも親交を持ち、パガニーニ、ロッシニといった当時の花形スターとも共演しています。ジュリアーニの作品もさる事ながら、ギターの技量は群を抜いていたようで、オーケストラの後にソロでギターを演奏することもしばしばあり、オーケストラに一步も退けをとらない素晴らしい演奏をしたと言う文献があります。全作品数は300曲以上で、そのうち自分で作品番号を付けたものは151曲となっています。

[オペラ《ファンション》の主題による大変奏曲OP. 88]

(Grands Variation sur la favorite de l'Opera Fanchon)



ヒンメルオペラ《ファンション》(またはファンコン)より「ロマンス」の部分テーマにして序奏と6つの変奏曲からなります。当時は変奏曲が大流行し、名人芸を競っていたわけ、腕自慢のジュリアーニらしい大胆な作品と言えます。華やかなカデンツァが入った<序奏>の後に、軽快な<テーマ>が表れます。<第1変奏>では3連符が続き<第2変奏>では3度音程がちょこまか出てきます。<第3変奏>では3/2分音符が華やかに、<第4変奏>ではギター独特の「カンパネラ奏法」を使います。<第5変奏>で一転してマイナーになり、<第6変奏>では嵐のような「アルペジオ」で幕を閉じます。殆ど弾かれることのない作品ですが、近い将来はきっと流行するような気がします。

●ホアキン・マラッツ (Joaquin Malats 1872~1912)

マラッツはスペインのピアニストで、同時代の作曲家アルベニス、グラナドス等と親しくしていたようです。残念なことに手元に資料が殆ど無いために、マラッツについて詳しい事は分かりません。もし知っている人がいたら教えて下さい。

[スペイン・セレナータ]

(Serenata Española)



マラッツのピアノ組曲「スペインの印象」に収められている曲で「セレナータ」と題されています。F. ターレガがギター用に編曲して一躍有名な作品になりました。今回は大部分がターレガの編曲したのですが、1部分に「ロパテギ編」の入った「加藤編」となっています。

●ヨハネス・ブラームス (Johannes Brahms 1833~1897)

1833年ドイツのハンブルグに生まれ、コントラバス奏者の父より音楽の手ほどきを受けた後コッセル、マルクスゼンに就いてピアノを学び、15才で初リサイタルを行っています。20才の時にシューマンに会い、ブラームスの良き理解者となります。不幸にしてシューマンは精神錯乱を起こし、ライン川に投身自殺を計り、一命は取止めましたがこの事故以来精神病院で2年を過ごした後世を去ります。シューマンの妻クララを精神的に支えたのはブラームスでした。以後、クララはブラームスの生涯の理解者となります。ブラームスの作風は「新古典派」と呼ばれ、ドイツロマン派の中心的存在であるシューマンの意思を継いで、ロマン派の行き過ぎを押さえようとしています。バッハ、ベートーベン、ブラームスの3人を頭文字を取って「3大B」ということもあります。作品は4つの交響曲を始め、大学祝典序曲、ドイツ鎮魂曲等の大曲からハンガリー舞曲、「眠りの精」「子守歌」等の歌曲まで幅広くあります。肝臓癌で他界しますが、音学史に於いても重要な存在でした。

[弦楽6重奏のための主題と変奏曲OP. 18]

(Theme&Variations from Sextet OP.18)



ブラームスが27才の時に書いた作品で、原曲は第1、第2バイオリン、第1、第2ビオラ、第1、第2チェロから成る作品です。ギタリスト、J. ウィリアムスのアレンジによりギター2重奏の作品として蘇りました。重々しい<テーマ>から始まり、流れるように<第1変奏>に入ります。<第2変奏>では3連符が掛合い、<第3変奏>では32分音符のスケール(音階)が洪水のように駆け巡ります。<第4変奏>に入って急に雲の上に出たような穏やかな陽射しを感じます。<第5変奏>では星座を感じさせるような静かな時がやってきます。<コーダ>に入って再び重々しいテーマが流れますが、いつしか静かで平穏な最後を迎えます。ブラームスらしい重厚な作品で、弦楽とは一味違ったギターの響きをお楽しみ下さい。

[さくら変奏曲]

(Theme&Variations by Japanese Folk song SAKURA)



誰もが知っている日本古謡「さくらさくら」は、一年の内の春のたった一時期にしかその美しい花を見せない美しい「さくら」を見事に表している名曲といえるでしょう。横尾幸弘さん(大分県出身、ギタリスト、1925~)の「さくら変奏曲」が特に有名ですが、私の感性からすると余りにも品がよすぎる(私の品がないせいかな)ので、手直しや付け加えを試してみました。「さくら変奏曲」の原点は宮城道夫さん(1894~1956)が大正12年に作曲した2部の箏と十七弦による3重奏曲です。この作品から多くのヒントを得て私流にまとめ上げてみました。ゆっくりした<序奏>の後「さくらさくら」の<テーマ>が表れます。<第1変奏>ではお琴の効果を生かしたカンパネラ奏法、<第2変奏>は「通りゃんせ」に似たメロディーで、<第3変奏>では南米的なリズムで、<第4変奏>はハーモニックス音の効果を聞いて下さい。<第5変奏>でギターのトレモロを、最後の<第6変奏>では宮城道夫さんのオリジナルにできるだけ近い変奏を加えてみました。

(本日の使用ギター)

- 加藤繁雄; ラルス・ゴーマン(スウェーデン、1989)
- 原 静雄; デビッド・ホワイトマン(イギリス、1990)

